

月刊ウィーン GEKKAN-WIEN

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊平成元年 創刊27年目
創刊1989年 Nr.312

2015年6月号



Thomas Lawrence Klemens Lothar Wenzel Fürst von Metternich, um 1815 Öl auf Leinwand 105 x 131,2 cm
©Fürst von Metternich Winneburg'sche Domäne Schloss Johannisberg - Rheingau, Foto: Stanislaw Chomicki, Wiesbaden

Unteres Belvedere und Orangerie "EUROPA IN WIEN Der Wiener Kongress 1814/15"

ベルヴェデーレ下宮&オランジェリーでの企画展「ウィーンにおけるヨーロッパ」6月21日まで開催



杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 45



やや旧聞に属するが、三月二〇（二二日）にかけて、日本原子力学会の年会在茨城大学日立キャンパスにおいて開催された。福島第一原子力発電所事故関連では、特別講演「宇宙線ミュオンを用いた原子炉の調査」、「線量「シーベルト」の意味合いとそれとらえ方」、「福島第一の廃炉と原子力安全への取り組み」、「市民と専門家のギャップを超えるために「フォーラム」の取り組み」の四セッションが設けられた。その他、九件の総合講演・報告三件の合同セッション、十一件の部会・連絡会、九件の委員会、ポスター、その他四件、合計四のセッションで発表と討論が行われた。それ以外に十四会場において六・二七件の研究発表があった。さらに、二・三日には日本原子力学会賞の授賞式も開催された。

「英国の原子力研究開発と日本の今後の協力」セッションでは、英国から四件の原子力研究開発の状況に関する講演と東大の岡本教授から英国との研究協力の状況について講演があった。最後に筆者より、「日本におけるシビアアクシデントに関する研究」と題する講演を行い、我が国のシビアアクシデント研究の状況を述べるとともに、英国との共同研究の可能性について



日英関係者打合せ参加者

いて言及した。セッション終了後も英国の参加者と我が国の関係者との今後の両国の研究協力について協議した。熱流動部会全体会議では筆者が部会長として受賞者を表彰するという晴れがましい場面もあった。筆者の研究室の古川君と相馬君の二名の学生が研究発表する機会を得、さらには、昨年古川君に続いて相馬君が各大学一名の二六年度フェロー賞を受賞したことが個人的には特記される。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の水族館について述べてみたい。ウィーン市内にある海洋館は、ショップング街として親しまれているマリアヒルファー通りからほど近いところにあり、第二次大戦中に高射砲塔だった巨大な建物を利用して、熱帯の淡水魚や海魚、地中海の魚類、オーストリアの淡水魚、サメなど総数一万匹以上を床面積約四千平方メートルの建物内にある水槽に展示している。水槽はオーストリア最大で二百トン。ハナザメ、テンジクザメなどが遊泳している。二〇一三年九月に新設された百五十トンの水槽は地上十階にあり、シュモクザメが泳いでいる。最上階の十一階にあるカフェと展望台から見渡すウィーンの街並みは素晴らしい。二〇〇九年には三万五千人の入場者があった。

一方、京都駅近くの梅小路公園内に二〇一二年三月にオープンした京都水族館は人工海水を利用した我が国初の水族館である。鴨川に生息する国の特別天然記念物・オオサンショウウオを始め、イワナ、ゴマフアザラシ、ケーブペンギン、サンゴ礁、熱帯魚などを含む動物約二百五十種・総数約一万五千匹を展示している。水槽総容量は約三千トン。延べ床面積約一万平方メートルを誇る三階建ての建築物は九つのゾーンに分けて展示されている。「水と共につながる、いのち」がコンセプトである。屋外にあるイルカスタジアムの観客席からは東寺五重塔を遠望できる。二〇一三年度には、三〇万人の入場者があった。両水族館は海から離れた盆地にあり、人気があることが共通している。

余談であるが、筆者はウィーン赴任中、うかつにも海洋館の存在を知らなかった。京都水族館には孫と二階に二回訪問して最新の施設を満喫した。両市の水族館を紹介できた幸運に感謝しつつ、海洋館と同じくマリアヒルファー通りに近い文化施設、ミュージアムクォーターのスケッチを掲載させていただく。

■杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■

